


読書推進運動


 公益社団法人
 読書推進運動協議会
 〒101-0051
 東京都千代田区神田神保町1-32
 出版クラブビル6階
 TEL 03(5244)5270
 FAX 03(5244)5271
 発行人 佐々木 泰
 編集人 片岡 伸子
 定価 60円

No.667

★「全国読書グループ調査」準備中(2頁)
 ★福島県矢祭町「子ども司書講座」レポート(5頁)

会員の購読料は
会費の中に含まれる



長谷川書店ネスパ茅ヶ崎店
店長

はせがわしずこ
長谷川静子

●街の書店の読書推進

地域と本をつなぐ、書店の「お楽しみ」

茅ヶ崎駅前の長谷川書店のギャラリィで毎月1回開いている、小さい子ども向け「絵本とおはなし会」は6月に284回目。大人も楽しめる作品を演じる「かみしばい劇場」は、もうすぐ170回を数える。学級崩壊のニュースが連日流れた25年前に、21世紀に生きる子どもたちに書店としてできることはなんだろう、絵本を通じての親と子の心と肌のふれあいが成長につながるのでは、の思いで始めた会だ。

あるとき、絵本とおはなし会の参加者に「大人向けのものはありませんか」と言われて、「そうか、大人ももつと絵本を楽しんでいいんだわ……」と気づいた。だが、大人向けってなんだろう。ひとりで楽しむ読書を大勢で楽しむにはどうしたらよいか。本の世界を、読書の楽しさを感じていただく、豊かな心持ちになっていただく、一冊の本をよりいっそう自分のものにしていただくことが読書推進活動と気づき、大人向け「読書お楽しみ企画」を始めた。

これまでに、講座、講演会、ワークショップ、朗読会などを開いている。どの企画でも、店頭の商品ぞろえと同様に「地元、地域」を意識している。地元の「大山街道について」の書籍案内が出版社からあつたときには、著者に取り次いでもらい、著者講演会が実現した。ただ話を聞くだけではなく、たたくなかつたので、市内、在野の研究者をお誘いし、ほかの参加者も加わって、たがいに学ぶひとときとなった。

この会はその後の地元・湘南方面の歴史を学ぶ企画につながっている。

学生時代に出会った本を朗読で楽しむ「あの名作をもう一度ドラマチックリーディング(朗読会)」では地元作家の開高健をはじめ、宮沢賢治、川端康成などを取りあげてきた。朗読はコンクール受賞歴もある地元の学識経験者にお願している。「本を読んでもらえるのは心地よい」と好評だ。

「雑誌○○ができるまでのお楽しみ」では、講師の編集者にゲラ刷りも見せていただいた。失敗談や製作秘話など、ものづくりに通じる話に、参加者からの質問が絶えず、「毎月の雑誌が楽しみ!!」と定期購読を始めた方もいる。

企画には、出版社・お客さまの協力も欠かせない。出版社からは講師の手配や配布テキストなどの提供をいただく。「○○先生を知っていますよ」というお客さまの話から実現した講演会も多い。

お楽しみ企画は、参加者同士の会話がはずむ。顔見知りも増えているようだ。「かみしばいサークル」「大人の塗り絵を楽しむ会」などのサークルも生まれた。大人の塗り絵の会は、展覧会を開催するほど活発で、お楽しみ企画が生涯学習へと続いていると感じている。

「地元」があつてこそ私どもの日々がある。そして、あたり前のようだが、店にそろえた「本」こそ、お楽しみみの「宝」である。お店はお楽しみみの宝庫なのだ。地域と人を想い、時間と場を共有し、おたがいに感動を生む、感動を伝えて地域文化を紡いでいきたい。

茅ヶ崎市民、読者の力をいただきながら、文字活字文化を紡ぐ。私どもの読書お楽しみ企画は地産地消であり、まさしく「茅産茅消」である。

「2023年度 全国読書グループ調査」を 実施します！

公共図書館・類縁機関ほか、みなさまのご協力をお願いいたします

2023年度、公益社団法人読書推進運動協議会は、全国公共図書館協議会のご協力をいただき、「全国読書グループ」を実施いたします。

前回(2018年度)調査以来5年が経過しており、また、この5年間は新型コロナウイルス感染症の影響も大きく、相当の変化があることが予想されます。今回も全国の公共図書館や公民館に登録されているもの、あるいは聞き取りその他の方法で把握されているグループなどの現況を明らかにして、読書推進運動の記録、資料としたいと願っております。

2023年度の調査につきましては、7月中旬に各都道府県立図書館・読進協へ調査票配布についての希望をうかがい、8月下旬以降に調査要項と調査票をお送りします。ご記入いただいた調査票は、11月以降に回収、その後集計し、「全国読書グループ総覧 2023年度版」として刊行します。総覧は、調査にご協力いただいた図書館・類縁機関をはじめ、当協議会関係者のほか、図書館学や司書課程講座を有する大学へ、お送りする予定です。

みなさまのご協力を賜りますこと、お願い申し上げます。

■日本絵本賞発表

紙の絵本を手にする喜びに満ちた 作品が大賞受賞

公益社団法人、全国学校図書館協議会(全国SLA)は、「第28回 日本絵本賞」について、4月25日(火)に最終選考会を実施し、2022年に出版された絵本より選ばれた最終候補絵本30点より4点の受賞作を決定、5月15日(月)に発表した。各賞は以下の通り。

●第28回 日本絵本大賞

『PHOTEK 北極を風と歩く』

荻田泰永/文、井上奈奈/絵

(講談社)

●第28回 日本絵本賞

『がっこうにまにあわない』

ザ・キャビンカンパニー/作・絵

(あかね書房)

『ねことことり』

たてのひろし/作、なかの真実/絵

(世界文化社)

『橋の上で』

湯本香樹実/文、酒井駒子/絵

(河出書房新社)

『PHOTEK 北極を風と歩く』

は、5名の最終選考委員の評価が一致して高く、大賞に選ばれた。

文章は北極などおもに単独徒歩行に取り組む冒険家によるもので、PHOTEK(ピヒュッテイ)は作者がイヌイットの友人からつけられた名前です。「雪の中を歩いて旅する男」の意味。端正な筆致の文章で、極地を歩くさまを表現していて、色彩感覚に満ちた絵とあわせて、北極を感じることができ。装幀や造本にもさまざまな仕掛けが施されており、紙の本の魅力に満ちている。

『がっこうにまにあわない』は、1分ごとに開き単位で画面が変わり、焦りながら突っ走る少年の

姿をエネルギーシユな絵とともに描いた作品。最後の見開きで、少年がなぜそんなに焦っているかわかる展開も楽しい。

『ねことことり』は、細密画のリアルな描写と鮮やかな色彩がみごとで画集としても楽しめる。猫と小鳥の心あたたまる交流を描いたファンタジーだ。

『橋の上で』は、ひとりて川を見ていた孤独に見える少年の目線を通して、命の尊さという重いテーマに挑んだ作品。モノトーンで粗めの絵のタッチも魅力的である。

今回、翻訳絵本賞は該当作がなかったが、選考では印象に残った翻訳絵本が複数あった。最終候補絵本全体として作風も本の作りもバラエティ豊かで、電子データでないリアルな絵本の可能性をあらためて感じた。

表彰式は6月22日(木)、城西国際大学紀尾井町キャンパスで行われる。



日本絵本賞大賞の『PHOTEK』



日本絵本賞「がっこうにまにあわない」

■日本児童文芸家協会 各賞発表

子どもたちが一歩を踏み出す力と
なる作品が受賞

一般社団法人 日本児童文芸家協会は、5月19日(金)、東京都千代田区の出版クラブホールにて、「2023年度 児童文化功労賞・協会賞・新人賞 贈呈式」を開催した。

●今年度の受賞作・受賞者

【第47回 日本児童文芸家協会賞】

歌代朔『スクラッチ』(あかね書房)

【第52回 児童文芸新人賞】

林けんじろう『星屑すびりつと』(講談社)

【第62回 児童文化功労賞】

矢部美智代(児童文学作家)

黒井健(絵本画家・イラストレーター)



壇上にそろった今年度の受賞者たち

ター)

寒河江信(前ひろすけ童話賞委員会委員長)

協会賞の『スクラッチ』はコロナ禍の中学生を描いた作品。歌代さんは、物語の中心に夢へと突き進む子どもをすえたが、「やりた

いことを見つけていない子どもたちがほとんど。その子たちが夢を持つこともあるんだ、と思うきっかけになればうれしい」と語った。

新人賞の林さんは、闘病中の兄をモデルに執筆。兄はこの作品の刊行前に他界したが、「天国からの励まし、そして、私の心の中に残った兄の魂のひとかけらが、すてきな本になりすばらしい賞となった」と喜んだ。

功労賞は3名。同会前理事長の矢部美智代さんは昨年4月に逝去、姪のかわすみじゅんこさんが代理で挨拶を述べた。黒井健さんは、すぐれた童話と対話しながら描く喜びを紹介した。寒河江さんは「ひろすけ童話賞(山形県高島町)は多くの作家の支援を受けて運営している」と感謝した。

■日本児童文学者協会 各賞発表

いまを生きる子どもたちのリアルによりそった作品を評価

一般社団法人 日本児童文学者協会は、今年度の同協会各賞の受賞作を発表した。

●本年度の受賞作・受賞者

【第63回 日本児童文学者協会賞】

山本悦子『マスク越しのおはよう』(講談社)

【第56回 日本児童文学者協会新人賞】

鳥美山貴子『黒紙の魔術師と白銀の龍』(講談社)

親地連4年ぶりのセミナー開催

5月13日(土)、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターにて「おやちれんセミナー2023 2022年子どもの本をふりかえつて(主催)親子読書地域文庫全国連絡会(親地連)」が開催された。

4年ぶりの会場開催とあって、全国各地から会員が集まり、冒頭では、親地連元代表の広瀬恒子さんも挨拶に立った。

講師は繁内理恵さん(児童文学評論家・図書館司書)。繁内さんは、「2022年はロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、暴力について考えざるを得ない一年となった」とことや、遠い国での戦争が物価高、軍事費増額などに繋がっている現状を踏まえ、子どもたちに平和について考える機会をどう手渡すか、いのちの尊厳についてどう考えるかを中心に、40冊以上を

『黒紙の魔術師と白銀の龍』は、折り紙がモチーフのファンタジー。歴史軸を通して、単純に善悪だけでは片づかない複雑さも描かれていること、登場する子どもたちのリアルな様子が受賞につながった。

詩集『星の声、星の子』は、前半はことば遊び、後半は子どもへの問いかけが中心となっている。特に、問いかけのユーモラスな点と新鮮さが、選考委員の支持を集めた。

贈呈式は5月26日(金)、東京都内で関係者のみが出席して行われた。

平和といのちを考える
新刊児童図書を紹介

講師は繁内理恵さん(児童文学評論家・図書館司書)。繁内さんは、「2022年はロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、暴力について考えざるを得ない一年となった」とことや、遠い国での戦争が物価高、軍事費増額などに繋がっている現状を踏まえ、子どもたちに平和について考える機会をどう手渡すか、いのちの尊厳についてどう考えるかを中心に、40冊以上を

紹介された図書は、親地連会員が手分けして持参し、会場で展示。参加者が自由に手に取ることでできた。



平和、いのちをテーマに図書を紹介する繁内さん

■全出版人大会開催

この先100年を見すえた出版活動への
思いを新たに

ゴールデンウィーク明けの5月8日(月)、東京都千代田区のホテルニューオータニで「第62回 全出版人大会 主催 日本出版クラブ」が開催され、出版関係者約400人が出席した。

野間省伸大会会長・日本出版クラブ会長は4年ぶりに従来とおりの開催形式になったこと、これ、大会声明については、変化の局面にある出版界にとって、進むべき未来を示唆する内容であると述べた。大会声明は廣野眞一大会委員長(集英社)が朗読。ベンチャー精神に満ちた先人たちが確



大会声明を朗読する
廣野眞一大会委員長

立してくれた出版ビジネスについて述べ、この先100年の道筋をつけることが出版人の仕事であると結んだ(全文は下記別掲)。声明は拍手で採択された。

来賓祝辞のあと、恒例の長寿者祝賀(19名)、永年勤続者表彰(324名)があり、それぞれの代表者の謝辞に続いて、政治学者で東京大学名誉教授である姜尚中氏が講演。姜氏は現在、絵監修者として関わっている全12巻の『アジア人物史』(集英社)を紹介。アジア領域の歴史について俯瞰的な見方ではなく、歴史上の1万人に上る人物に焦点をあてて、その積み重ねによって神話の時代から今日までを浮き彫りにする企画であると述べた。そして日本の出版産業について、「競争力のある文化産業」ではないかと語った。

講演終了後、4年ぶりに飲食をともなう懇親会がにぎやかに行われた。新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが5類に移行した当日であり、「アフターコロナ」を実感する会ともなった。

大会 声明

今から100年前の1920年代、つまり大正の終わりから昭和の初めは、出版界が急激に拡大した時代でした。1923年の関東大震災を乗り越えるかのように、雑誌と書籍の流通が結びついて日本全国にはりめぐらされた販路を通してベストセラーが続々と生まれ、週刊誌も誕生し、円本の文学全集による教養熱が高まり、雑誌『キング』は100万部を突破しました。ラジオやレコードとのタイアップが広まり、性科学など女性のための教養書も刊行されます。書店が増え、再販制度の原型が現れ、印刷技術も進歩し、出版点数は飛躍的に増えました。まさにベンチャー精神に満ちあふれ、現在に至る出版ビジネスの基礎が確立した時代と言えます。

ちなみに1920年代のヨーロッパでは、初めて「ロボット」という言葉が登場する戯曲『R. U. R.』が書かれ、映画『メトロポリス』が上映されました。ともに人工知能と人間社会の軋轢を描くもので、現在のAI論争の先駆けと言えます。

その後、戦時下と占領下における出版統制と言論弾圧という試練がありました。1950年代に再び出版界全体の立て直しが始まり、1953年にはこの日本出版クラブが設立され、今年70周年を迎えました。

このように、私たちの先人たちは、困難な時代においても実にたくましく働き、知恵と知識を、多様な価値観を、心を豊かにする物語を、日常を彩る娯楽を、孤独な魂には居場所を、提供してきました。そして、目の前の厳しい現実をも乗り越え、精神の自由をこの社会に広めてきました。

今、出版界は大きな変化の局面にあります。デジタルプラットフォームが情報の流通を大きく変え、コロナ禍はその変化を加速しました。さらにAIの進歩はクリエイティブの本質とは何かを私たちに突きつけています。近年、出版業界の未来に悲観的な声が聞かれるのも事実です。

このような状況で思い出すのが、生涯、自由な精神を追い求めた堀田善衛さんです。移動し、行動し、世界中の人々と交流し、真にグローバルな視座で考え続けた方でした。そして、どんな状況においても悲観せず、ひたすら観察した方でした。そのための補助線として、鴨長明やゴヤ、モンテーニュら、かつて戦乱の時代を観察した人々の思考と感性を丁寧にたどりました。

そんな堀田さんは「現在は過去と未来を内包する」、そして「歴史は繰り返さず、人これを繰り返す」と語っています。

我田引水ではありませんが、かつて出版文化を築いた先人たちの精神を想像すると、そこで私たちが何よりも大切に受け継ぐべきは、冒険心に満ちあふれ、精神の自由を追い求めた、そのたくましい魂ではないでしょうか。堀田さんはとにかく考え続けた方でしたが、私たちが今の出版界あるいは社会の課題についてどんなに考えても、答えは得られないかもしれませぬ。しかし、何がわからないかがわかれば、それは誰かと共有できます。個人を超え、組織を超え、業界を超えてつながることもできるはずですよ。

そして現在の出版界には、先人たちが残してくれた大きな財産があります。それは社会からの信頼です。今も多くの読者と才能は、書物というメディアに特別なリスペクトを抱いてくれています。また、書店が地域のコミュニティとして再評価される動きも、各地で起きています。

100年にわたる先人たちの仕事の上に私たちが今立っていることに感謝しつつ、この先の100年の道筋をつけるのが私たちの仕事であることをあらためて確認し、第62回全出版人大会の声明といたします。

2023年5月8日

第62回 全出版人大会

「子ども司書講座」を町内全児童が受講

子どもと図書館、地域、学校を結ぶ、 矢祭町「子ども司書講座」の14年

福島県矢祭町地域おこし協力隊 大羽 未准

子ども司書講座の始まり

矢祭町には、「町に図書館がほしい」という町民の声を受け、全国から寄贈の本を募って2007年に開館した、矢祭もつたいたい図書館があります。この図書館を拠点に、本や読書の楽しさを子どもたちから町内に広めていこうと、2009年に矢祭子ども司書講座が始まりました。



図書館と本の基礎知識を得ることは情報収集力を向上させる

昨年4月に着任し、今回、子ども司書講座を担当しております。学校と図書館をつなぐ役割をはじめ、町内の事業者さんと一緒にイベントを行うなど、矢祭町のみならず本に本の輪をつなげるような活動をしております。

読書の町 矢祭

子ども司書講座では、背ラベルやNDCなどを学び、「おはなしかい」の企画やビブリオバトルの実践などを行います。図書館や本についての基礎的な知識を学ぶことで、子どもたちは効率よく本を探して活用できるようになり、「おはなしかい」の準備や読み聞かせの体験を通して、町内の方とふれあひながら本の楽しさを伝えてくれています。

「おはなしかい」で読み聞かせする絵本は、聞く人のことを考えて真剣に吟味して選び、読み聞かせの練習もしっかり行います。子ども司書たちが一生懸命準備する「おはなしかい」だからこそ、地

域のみなさんが集まる交流の場となるのだと感じています。参加する町の方も、まっすぐに子どもたちの読み聞かせに耳を傾け、毎回楽しんでくださっています。子どもたちが選ぶ絵本や紙芝居をきっかけとして、地域のみならず新たな本に出会い、読書をしてみようとする場面も多くなりました。

子ども司書講座が新たなステップへ

14年にわたり行ってきた子ども司書講座ですが、今年度からは小学校のカリキュラムに入れ込んで、2年生から6年生までの全児童が子ども司書を目指して学ぶこととなりました。6年修了後には、全員が子ども司書の資格を取って卒業となります。4月に開講式を行い、授業としての子ども司書講座が始まりました。今までは希望者のみの講座でしたが、矢祭町の子どもたち全員が対象となったことで、本や読書への意識が町全体へより浸透していくと考えています。

また、小学校で授業を行うことで職員同士のつながりを深め、図書館と小学校のいっそうの連携を図ることもねらいです。密に連絡を取りあい、さまざまな先生とコミュニケーションをとり、授業での困りごとの相談を図書館にしやすいかなったり、児童がどんな本を読みたいのかを図書館職員が直接子どもから聞けたりと、子どもたちの読書支援の体系を強固にして、きめ細かな支援ができるようになると考えています。

子どもたちは意欲的に授業に参加し、楽しみながら学んでいます。図書館内での本の整理方法を学ぶ授業の「この本見つけて！名探偵いさん!!」では、背ラベルの情報からグループで本を探し、もつとほかの問題もやりたいと言ってくれました。NDCや背ラベルの意味、本棚の並び方など図書館の配架を見比べて、本棚の並び方から本の場所を予想して取り組む姿が多く、講座内で学んだことが生かされています。さらに、背ラベルのカタカナと作者の頭文字が同じかどうかを、奥付を見ながら確かめている児童もあり、国語の授業で学んだことを実践し、本を活用している様子もうかがえました。

子ども司書講座が授業となるこ



授業となったことで、国語をはじめとする教科とのつながりも生まれている

とで、子どもたちが本や読書の楽しさを感じたり、好きな本に出会ったりと、本と関わる子どもたちが増えていくといいなと思っています。

第15回 手づくり絵本コンクール

矢祭もつたいたい図書館では、手づくり絵本コンクールを開催しています。一次審査会には、子ども司書講座を受講した子どもたちも審査に参加します。最終審査には、ノンフィクション作家の柳田邦男先生、絵本作家のあべ弘士先生をお招きしております。募集期間は2023年7月1日(出)から9月20日(水)です。詳しくは矢祭もつたいたい図書館ホームページに7月上旬公開予定の募集要項をご確認ください。

優良読書グループの歩み (6)

2022年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

お話しボランティア 「イクタン号GO」

代表者 塩田 月子

福島県本宮市
福島県立図書館
〈推薦〉

お話しボランティア「イクタン号GO」は、1997年に、公共図書館「しらかわ夢図書館」開館に伴う図書館ボランティア養成講座の修了生を中心に発足し、現在にいたっています。

年一回の定期総会において、代表、副代表、庶務、会計、監事を選任し、各役員がそれぞれの任務をはたすことで、活動がスムーズに行われています。

また、毎月第4土曜日に定例会を設けています。定例会では、その月のおはなし会の反省、翌月予定のおはなし会の担当者を受け持ち、演目を決め、それぞれ持ち帰り

ます。
また、図書館と連絡を取りなが

らりハースル日程の確認、その他の話しあいを行っています。

「おはなし会」は、図書館より依頼を受けたものを中心に行っています。図書館での定例会に加え、市内保育所、幼稚園、小学校、また地域での催事や直接依頼を受けたものなど、年間60回あまりになります。

おはなし会に臨むにあたっては、絵本などをそれぞれ練習し、おはなし会ごとリハースルを行い、図書館司書のアドバイスをいただきます。そして本番ということになります。

おはなし会終了後は図書館に戻り、反省会をし、私たち演じる側の評価や反省点、観てくれた人たちの反応などを報告書に残し、次の参考にしていきます。

当グループは、20余年の歴史がありますが、当然メンバーは入れ替わっています。それでも充実した活動を続けることができています。一人ひとりの読書活動への考えや思いが同じ方向を向いてい

ることと、指導をいただき、協力しあうという図書館とのよい関係が続いているからだと思えます。

また、図書館やその他で開催される読書活動関係の研修会へ参加することなども、活動意欲へとつながるものだと思います。

メンバー同士が一緒に活動するなかで感動や技術的なものを共有すること、また、この活動すること、私たちが自身の心が豊かになったり、「張り」になったりすることが、これから先も前に進んでいくための大事なものだと思います。

同じ思いを持つ新しいメンバーが増えていくことを、期待しています。



多くの親子が参加した「夏の特別おはなし会」

西大寺子ども ライブラリークラブ

代表者 時實 達枝

岡山県岡山市
岡山県読書推進運動協議会
〈推薦〉

図書館とチームワークの35年

私たち西大寺子どもライブラリークラブは、岡山市立西大寺図書館をベースに1998年1月に発足しました。その前年、当時の館長から「子どもの部屋」を設けしたので、ボランティアをしてもらえないかと私に話がありました。私が所属していた岡山県子ども文庫連絡会の優秀な方々に講師をお願いし、4月から9月までの講座を開催後、フオーアアップに残られた方にメンバーになっていただきました。毎週の「子どもの行事」、四季に応じた「子ども会」など、約35年続けています。

西大寺市民会館に併設されていた西大寺図書館は、全国緑化フェア開催を契機に移転し、「西大寺緑花公園緑の図書室」となりました。「緑の図書室」建設に際しても、図書館職員などのみなさまからいろいろ情報をいただきながら、意

「なつの子ども会」ではおはなしのあとに魚釣りゲームも



見交換してまいりました。当時のことを、とても懐かしく思い出します。

西大寺図書館では窓のない「子どもの部屋」での毎週のお当番第1週「おはなし」、第2週・第4週「絵本」、第3週「紙芝居をメインにした担当者のオリジナルプログラム」でしたが、緑の図書室では絵本などのある「子どものコーナー」が会場になり、とても明るくなりました。四季に応じた「子ども会」では毎週の内容を組み合わせて、広い部屋でのイベント型にしています。

地域においては、公民館・学校司書・ボランティアグループなどと協力して「子ども読書フェス

ティバル」や、岡山市内および近隣の図書館・小学校・幼稚園・保育所への読み聞かせ、工作などに掛けています。岡山市社会福祉協議会の中学生・高校生の「夏のボランティア活動」も、積極的に受け入れています。

子育ての中から始めたメンバーも、孫育ての年代に入りました。発足した初期のころは、夏や冬には岡山市立西大寺公民館で大きなイベントを開催してきました。近年はキャリアを積んできたことと、時間的な制約もあり、小ぶりなイベントを開催しています。

西大寺子どもライブラリークラブのメンバーは、子どもに「ころ」をよせて永年続けています。メンバーが紆余曲折しているときはその想いを受けとめ、少しお休みされてもお待ちします。その間も、例会・勉強会やメールなどで、情報は共有できるようにしています。

西大寺図書館を経て、緑の図書室のみなさまとは、これからも協力し、「子ども読書活動」が推進されるように活動したいと思えます。

ななつの子の会

代表者 佐々木明子
熊本県天草市

熊本県読書推進運動協議会
〈推薦〉

2002年、河浦町立図書館(当時)がビデオ上映会と読み聞かせ会を始めました。当時は読み手も、司書さんと教育委員会の職員さんふたりでした。たまたま見学に行つた私が参加させてもらつて、はじめのうちはささやかにやつていました。もつと多くの人に呼びかけてみたらどうかということになり、その年のうちに読み聞かせの学習会を開始し、ボランティアを募つたところ、20数名のグループができました。保育士希望の若手から現役引退後の熟年の方までさまざまなメンバーが集まり、バラエティに富んだ活動が始まりました。

最初の出しもの手袋シアター『からすの赤ちゃん』がとてもかわいかったからということからグループ名は「ななつの子の会」に決まりました。活動は、子ども読書の日のイベントや、当時近隣の小学校で夜実施されていた親子

どこの会場でも子どもたちのエネルギーを感じて



読書会への参加、その他、定期的ではなかったものの町内小学校や保育園での読み聞かせなどでした。ときどき集まって実施報告や意見交換などもし、和気あいあい、とても楽しく活動してました。町のコーラスグループとコラボして、ステージでピアノの即興伴奏をバックに、メンバーふたりが読み聞かせした『あらしのよるに』は、いまだに鮮烈な記憶として残っています。

しかし、少子化で学校が統合され、町内に小学校が1校になってからは、親子読書会も運営が困難になり、20年近くで終了。また、当会の会員数も減少し、現在9名で活動しています。その後、小中

学校で朝の読み聞かせが始まり、あわせて年に12回行つています。また、3地区の保育園には年6回ずつ訪問しています。市の巡回おはなし会にも数回、介護施設や児童館などにも要請に応じて回つたりと、少人数でフル回転活動をしています。

小中学校の朝の活動はほとんど読み聞かせですが、保育園や児童館、巡回おはなし会では、絵本だけでなく、紙芝居やペープサート、パネルシアター、歌遊びなども組みあわせて実施しています。毎回子どもたちにエネルギーをもらつて帰ってきます。

課題は、新メンバーの獲得ですが、これからもマイペースでゆつくと(熊本弁で「ゆつくりと」)楽しみながら、活動したいと思えます。



■学校図書館を考える全国連絡会 集案内

学校司書の現状を踏まえ、
学校図書館の整備を考える

学校図書館を考える全国連絡会は、7月8日(土)、東京都中央区の日本文学館協会で、「第26回集会ひろこう！学校図書館」を開催する。

今回は、学校図書館法公布70年を迎えた現在、特に大きな問題となっている、学校図書館の担い手である学校司書を中心にあげる。記念講演「いま求められる学校図書館専門職員制度ー学図

法70周年を的確な施策の決断の年に」の講師は、日本文学館協会元理事長の塩見昇さん。また、香川県学校図書館協議会顧問の田中綾一さんが、問題提起「学校図書館の現状に関する調査 平成4年度〜令和2年度結果から」を行う。

塩見さん、田中さんへの質問を含めた意見交換の時間も、予定されている。会場での開催だが、Zoomに

■日本子どもの本研究会 全国大会案内

本を通して子どもに希望を伝える
大会を目指して

一般社団法人日本子どもの本研究会は、7月29日(土)・30日(日)に「第55回日本子どもの本研究会全国大会」を、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催すると発表した。

今回のテーマは、「未来をひらく子どもと本ー希望はめぐる本から人へ 人から人へ」。29日は同会会長の代田知子さんによる基調報告のあと、翻訳家の原田勝

さんの記念講演「想像力の使い道ーむこう側にいる人たちへ」が開かれる。例年同様に、各種講座、読書会、夜のつどいも開催。30日は8つの分科会と、翻訳家の百々佑利子さんの閉会講演「クシユラの奇跡ードロシー・バトラーの本棚が語ること」が予定されている。

参加には、参加費と事前の申し込みが必要。同会会員以外も参加

よるオンライン参加も可能。参加には参加費と事前申し込みが必要となる。参加申し込みの締め切りは6月30日。同会ホームページより参加を申し込める。

●学校図書館を考える全国連絡会 ホームページ

<https://www.open-school-library.jp/>



【上】全国連絡会ホームページ
【右】集会参加申込ページ

できる。29日、30日どちらか1日の参加も可能。また、宿泊希望も受け付ける(先着順)。

参加方法や当日のスケジュール、および、講座・読書会・夜のつどい・分科会のテーマなどの詳細およびリーフレットはホームページに掲載中。参加申し込みもホームページからできる。ただし申し込み受付は6月18日から7月23日までなのでご注意ください。

●日本子どもの本研究会

ホームページ
<https://www.jaschonken.com/>



事務局報告(5月)

☆4月23日(土)5月12日(土)「第65回こども読書週間」

・4日(土)5日(日)「上野の森親子ブックフェスタ2023」開催

・8日(土)「第62回全出版人大会」出席

☆8日(土)「機関紙『読書推進運動』666号 入稿」

☆9日(日)「機関紙『読書推進運動』666号 責了」

☆9日(日)「子ども読書推進会議の決算監査(日本書籍出版協会、日本書店商業組合連合会)」

☆12日(水)「全国公共図書館協議会へ「2023年度全国読書グループ調査」への協力を依頼」

・13日(木)「親子読書地域文庫全国連絡会セミナー」(2022年、子どもの本をふりかえって)出席

☆15日(土)「機関紙『読書推進運動』666号 出来」

☆15日(土)「各道府県読書推進協他へ「第52回 野間児童賞推薦」受賞候補者推薦依頼を送付」

☆17日(日)「2023年度第1回理事会開催」

☆18日(月)「本年度定時総会開催案内を会員社へ送付」

・19日(火)「日本児童文芸家協会 各賞贈呈式」出席

☆22日(金)「2023年度第2回理事会について案内状と資料を理事に送付」

・22日(金)「第56回造本装幀コンクール 下見会」出席

・23日(土)「第56回造本装幀コンクール 審査会」出席。審査員として読書推進運動協議会賞を選出

・23日(土)「第54回 講談社読本賞贈呈式」出席

・24日(日)「令和5年度読書活動推進事業」についての審査。審査表を文科省に送付

・29日(金)「図書館友の会全国連絡会シンポジウム「公共図書館はどう伝えられるか」」出席

・29日(金)「日本雑誌協会懇親会」出席

●編集部 & 事務局の
ひとこと

●コロナが5類となり、人数を制限しながらも、各種講座や贈呈式が、リアルに開催されるようになってきました。4年ぶりの日本児童文芸家協会各賞贈呈式の冒頭で、同協会理事長の山本省三さんは、「外は雨だけれども、晴れやかに進めたい」と笑顔で挨拶。そのことばそのものの受賞者みなさんの笑顔は、本文写真をご覧ください。

●日本児童文芸家協会賞『スクラッチ』(あかね書房)は、歌代朔さんの2作目の著書。2011年にデビューして以来、結婚、引越しながらライフスタイルが変わるなか、なかなか2作目が出せず、「10年間あがってきた」と、受賞のことばがありました。

●『スクラッチ』の担当編集者は、忙しいなかでも歌代さんが短編を書いて送り返してくれたこと、短編は本になりにくくたりで話しあつたことなど、この10年の歩みを紹介してくれました。なにかとスピードと効率性が重視される時代ですが、10年の試行錯誤を経て1冊の本が刊行される重みを、感じました。